

江乃島記行 釈文

第一日 江戸八丁堀く神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣の事、あまた
じつとおもひわたらりつねど、何くねと世の
じつわねとげへ、また道の程もやへ遠
ければ、心にもまかせざりしを、
ばかりは何のよほる事もなくて、卯月
中の八日しのめに出だつ。空のけしき
いと静かなり。

ねぎ事のとしをかさねて夏衣
けふおもひ立 たびぞすがしき
高輪にてしばし休らふ。東海寺・海安寺
の紅葉、過にし秋見しおもかげなど
しのばれて、青葉しげれるさまも見ま
ほしけれど、行先のこそへまんに、立も
よらず、さめず・あらいが崎をも打過て、
大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも
いとやすらかにこえ、川崎の萬年屋と
いへるに立よらして、風の支度などつとへのへ、
神奈川の井桁屋にやどりぬ。それよ
むかひなる権現山にのぼり、海面はるか

・思いわたる：思い続ける

・つねど：けれども

・じつわねとげへ：(事・業)出来事、

仕事。

・じつげへ：じつへ

・中の八日：中旬の八日。

十八日の事

・(安政二年)四月十八日：

新暦の六月二日

・ね(祈)ぎ事：願う事

・夏衣：夏衣を裁つ^たの意から

「立つ」などに掛かる。

・高縄：江戸の出入の口「大木

戸」があった。

・海安寺：海晏寺

・あらいが崎：古くは荒蘭ヶ崎。

万葉集にも詠まれた景勝の

地。新井と入不斗両村合併で

入新井の地名が残る。

・六郷(川)：多摩川下流の名

・井桁屋：井桁屋の誤記

・権現山：現在の幸ヶ谷公園

台場建設のため削られた

野毛・本牧のあたりを見れば、たぬらげの
けづり心ほそく立ち上り、後
ぢまに見が入れば、田畑もまた一つの気色
なり。や、日も西にくだげば元のやうに帰る。

第二日

十九日晴、辰の刻近き頃、此やどりを
立たち、台の茶店を過て、浅間の御社に
詣よづ。富士の人穴と云へるもめづらし。
程が谷より金沢の道、まがりくて関と
いへる立場にやすらひ、山坂のけはき
道を過て能見堂にいたらぬ。この所の
景色、筆にもおよび難しとて、いこし入
巨勢の金岡が筆を捨けんも、実にこと
わりとおぼぬ。爰にふですての松とて
大樹あり。むかし、心越禅師この所に
来り給ひて、もろこの西湖の八景に
似たりとて、八景の名をぞつけられし
とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆
今に残れり。堂のかたはらに三星といふ
亭あり。そこより法師の出来て、八景の
所々見よとて、遠めがねてら物かしたり。

・気色：景色

・辰の刻：朝八時

・富士の人穴：芝生村の浅間神社に
あった穴。富士につなが
っているという伝説あり

・関：横浜市港南区関

この近辺では中心的な地区
で、明治大正期には郡役所が
あった

・立場：宿と宿の間で休息や人
馬の継立をしたところ

・巨勢の金岡：平安前期の貴
族・宮廷画家。

・ことわり（理）：もっともな
こと

・心越禅師：江戸初期に中国か
ら渡来した禅僧。

・西湖の八景：西湖十景の誤
か。金沢八景は湖南省「瀟湘
八景」に倣って制定。

・てら：とら

これにいたく興をそへて、爰にしばし

休らひ、それより立出て、道すがら君が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひしとかや。まがりくつて瀬戸橋の

かたはらなる東屋といへるに至りぬ。今宵の

やどりをこゝに定めて、さて照手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島の此方にて、汐の干

がたに下り立ち、はまべり其外いろくの

貝などひろふに、近きあたりのわらはは

寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。

はや夕みち来べしとて、舟人のあわ

たんとしうきとめくと、名残つきむねと

舟にうつしりぬ。彼わらはは共に菓子など

あたへ、すな取舟に縋ひかせし、ともに

入江へ帰るさの左りの方に、一覽亭

とて、はるかの山の上なるに上が見れば、

まじとにすべれたる所のなま、筆にも詞にも

ふせの山々見渡され、浦賀の崎・猿島・

上つ

・君が崎一葉の松：内海へ突き

出た君が崎にあった松。

八景図などに描かれる。

・東屋：瀬戸橋南詰めにあった

江戸名所図会にも描かれる

代表的な旅館。

・照手姫：伝説の小栗判官の妻

・ふすべ松：照手姫をいぶり殺

すため縛り付けた松。

かつては小島にあった。

・やとめとめく：騒々しく音をたて

る。むねむね

・すな取船：漁る舟

・帰るさむ：帰る時、帰りがけ

・一覽亭：九覽亭の間違い

・上つふせ：上総のいづ

えぼし^{島帽子}島・夏しま^島、海づら^面つつき^突出、

ひんがし^東北をのぞめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた^瀬・野嶋・

洲さき^崎・瀬戸を見おろし、又見かへれば、

うち川^内より不二のしら雪^瀬はるかにて、

何にたとへむやうもなし。詠^{よみ}尽せねど

日は不二の嶺^嶺にかくれ、たそがれ^{黄昏}近じつて

人々のすすめ^勸むれば、この山をおりて、また舟に

棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の

高^殿とのより遠目^鏡がね^{なま}取出て遠近を

見^巡めぐらす内に、日も暮はてぬれば、

燈火^照てらし湯あみ^浴などす。ほどなく網もて

取得^{とろえ}し魚など、望のま^まに物^{もの}して持出し

たれば、日頃は好まざねど、盃め^めぐらし、

つかくつて^取ふし^所じ^入つらぬ。

第三日

廿日晴、夫々に支度^調とんのへ、辰の^刻くの頃に

このやど^宿りを出で、瀬戸明神に詣^まつ。この

みやしろ^{御社}は頼朝公勸請し給ふとかや。

またび^{琵琶}は島弁財天の御やしろ^社に詣^まつ。

此^こは政子御前の勸請なりとぞ。蛇木と

いふ幾木ともなく生^なたたり。夫より金沢

・不二：富士

・高殿：高い建物

・物して：ここでは「料理して」

・ふしど：寝床

・瀬戸明神：瀬戸神社。治承四年（一一八〇）、伊豆三島明

神から勸請したと伝わる。

・蛇木：金沢八銘木の一、江戸

時代に台風で倒れた枯れ木

が瀬戸神社境内に残っている。蛇混柏（シヤビヤクシン）

・琵琶島弁財天：琵琶島神社

治承四年、源頼朝が三島明神を勸請して瀬戸神社を創建

した時、政子が日頃信仰する

琵琶湖の竹生島弁財天を勸

請、海中に島を築いて創建

・金沢侯：六浦に陣屋をおいた

一万二千石の大名。参勤交代

で金沢道を通った唯一の大

名。

院。創建年代は不明

侯の陣營の前より金竜院へ行。堂の

かたはらにおほきなる石あり、むかし三嶋

明神を此所に勧請せし時、いづち

よりか白幣飛来りて、此石の上にたてり。

なるゆえに飛石と名付とかや。こゝより

はるかこのほりてひとつの詠の亭あり。

昨日見し一覽亭とはまた八景の石

かはりて、いとあおもしろし。

百千度 見るともあかじ 金沢や

とりならべたる やつの名所

少しくおろりて竜灯の松あり。坂をおりて

此寺を立出。左りのかた塩場有。それより

田畑の中を過て朝比奈の切通しに

かゝる。この所坂道なり。右の方に鼻かけ

地藏とて石の仏あり。武蔵相模の

さかいとかや。弘法大師の作り給ふといふ。

此時にてしばらく休らひ、又まがりく

麦はたを過、梶原の屋敷あと、ほく焼

あみだ、せん水川を渡り、杉本の観世音に

詣づ。坂東一番の札所なりとぞ。哥の橋を

わたり、えがらの天神の御社にまつ。

・ おおきなる石：山上にあった

が文化年間の地震で現在の

地に落ちたという。

・ ひとつの詠の亭：九覽亭。

・ 昨日訪れた亭と同じ。

・ やつの名所：八景のことか。

・ 竜灯の松：？

・ 塩場：塩を作る所、かつて塩

田だった所

・ 朝比奈の切通し：鎌倉七切通

しの一つ。朝夷奈三郎義秀が

切り開いたという伝説。

・ 鼻欠け地藏：

・ 梶原の屋敷：梶原景時の屋敷

・ ほく(頬)焼あみだ(阿弥陀)

十二所光則寺の中尊を頬焼

阿弥陀と呼ぶ。

・ 杉本の観世音：三体の十一面

観音を本尊とする鎌倉最古

の寺院

・ 歌の橋

・ 荏柄天神：

・ 金竜院：臨濟宗建長寺派の寺

大^塔とうの宮の土の牢、此所右の方、頼朝公

・大塔の宮

屋敷跡、今は畑となれり。大^倉くら、この處

・頼朝屋敷

町家有。筋違橋、宝海寺前、北条ならびに

・頼経屋敷

頼^経つね将車屋敷あと、鶴が岡三の鳥居

・三の鳥居

前、雪の下なる大沢にてしばし休らひ、

・赤橋

安^案ない子を伴ひて赤橋といへるをす^通べ。

・紅白の蓮池

こゝに左り右にわ^分かれて紅白の蓮池あり。

右のかたに嶋三つ有。その中に弁天の社^{ちやう}有。

・八嶋：屋島のことか

いにしへは島四つ有しを、義経公八嶋出陣

の折、切かたんとて一嶋をき^切り崩し給ふ

よし。左りの白はすのかたは四^連鳶あり。池の

廻り松の木なみ^立たてり。二王門は三ツ棟

・仁王門、

づくり、此二王尊は雲慶の作とい^云ふ。左りの

かた護^方摩堂、不動尊を安置せり。大山の

不動尊と同じ作の由。昔平家追討の

とき、この御堂にて文^{もん}覚上人にこ^幸うぶくの

祈りをせさせ給ひしに、左りの方の童子、青

牛に乗給ひしが、こ^幸うぶくかんお^福うのしるし

にや、前のひ^膝びを折しといふ。正面神楽殿、

右に大塔、五^善智^薩ぼさつを安置せり。同じ

所にし^朱ゆろう、又臥竜柳あり。そのま^様ま

いじつへはたじそと思はるれ。なほ右のかたに

・たじそ：たぢそ、たぢかじ

姫石大明神とあがめし大石有、是を

・思はるれ：思はるの已然形

いのる時は、いじよりしもの病を治すといふ。

思われるけれど

夫より右のかた、社地を出て畑を過れば

寺有。門前に天正といふ年の御朱印の

制札建たり。本尊は十一面観世音を

安置せり。堂の前に由井の長者の七所に

たてしといふ塔立たたり。其娘の七つに

なりけるが、鷲捕にとられて鎌倉の府の

中に七所血を落したるに、其ところ所に

たてしとぞいふ云。此長者は北条家六代の

ころの人なるとかや。夫より尚坂をのぼれば、

頼朝公の五輪の塔有。玉がき垣、鳥居は寛永

の頃、薩摩の太守より奇附せられし

よし。右のかたの坂をのぼりて、大江広元・

島津忠久の墓参へまいる。また元の社地に

いりて、右の方に薬師堂有。神功皇后を

勧請せし由。若宮八幡宮の御やし社ろに

ま誦つづ。此御神は仁徳天皇を祝奉る由。

もとは由井が浜に有しを、こ云に云移し

奉りしといふ。此御社社にて昔頼朝公の

しづか御前に法樂の舞を乞給ひて、義経の

行入を尋とひ給ひしとや。夫より経堂

に参る。もろこじより七千卷の経文を

奉納ありしを、八角輪藏にをさめし

よし。こゝを出て八幡宮の石段、はゞ五間も

有べし。十間余りのぼる。左りの下に隠れ

いてうとて大樹あり。むかし若宮の別当

公暁、伯父実頼公を親の敵とて、此いてう

の陰より出てうちまゐらせしよし。北條

義時のはからひなりしとか。石段をあげれば、

右に鶴亀石・影向石とて三つあり。猶

右に六角堂あり。隨身門は是も雲慶

のしづくれりといふ。朱に金銀をちりばめ

たるみやしろのたふとしと云も余りあり。

万代も さかえ久しき 八幡山

あふぐもたかし 神の広まへ

廻ろこの内、若宮の神輿四ツ、八幡宮の

神輿三つを置り。鎌倉將軍以来の

宝物種々あり。御社を出て左りのかたに、

あいぜむ明王をくがみ、夫より丸山稻荷、

此みやしろは鎌足公勧請のよし。坂を

下れば頼朝公の御社有。なほ坂を下りて
十二院の惣門をいづ。昔は二十五ぼさつに
かたどりて廿五院有しが、今は十二院に
なりし由。右の方小袋坂をのぼりて
青梅聖天にまつづ。新居のゑんま、れいの
雲慶の作といふ。こゝより山の内へいで、
五山第一の建長寺へまいる。表門左りの方、
長者の七塔の内一塔あり。山門を入れて地蔵
堂、佐山地蔵と云。本堂のうしろ、庭前
の池の向いに松の大樹あり。昔若宮の
御神跡を此まつにたれ給ふとぞ。門を出て
杉が谷弁天に詣づ。弘法大師の御作といふ。
はるかに洞門を出て右の方、浄寿寺へ
まいる。尊氏公御建立のよし。足利家
十三代の御墓有と聞しかど、この日門に入
事をゆるさず。左りの方なる遥の山の上に、
冷泉為相卿の御はか有と云。山の麓に
山の内の上杉家の屋敷有しよし、今は
管領屋敷の名のみ残りてみな畑なり。
右のかたに矢柄地蔵尊立せ給ふ。権五郎
景政の守り本尊と云。爰を過て左の方、

・たれ給ふ…もたれ給うか

最明寺時頼のはか有^墓。松が岡東慶寺へ
まいる^参。表門に男禁制の札^建たてり。此所にて
しばし休らふ。日光御山への例幣使、今宵
鶴が岡へとま^泊らせ給ふとて、この所を過給ふ。
こゝを出て五山第二円覚寺へ参る。はる^遠かに
のぼりて大がね^鐘有。西洞和尚といふ人の鑄
たてしといふ。本堂は釈迦如来、天竺の
かつま^{羯磨}が作といふ。爰を出て五山第四浄智寺へ
参る。門の左のかた^方に五名水の内、かんろ水^{甘露}
あり。豊川御社有。北条時頼の建立と
いふ。此山をたゞに行過れば近道のよし、
小笹^押おし分つゝ、細き山坂を下り麦畑を
過て、けはい坂^{化粧}に至り、海蔵寺へまいる^参。この
おく^奥に弘法大師十六の井あり。その道の
かた^傍はらに千代能尾^{底坂}そこぬけの井、また
景清の土の牢など有。源氏山を右に
見て、英勝寺を過、扇^やが谷の管領屋敷に
いたる。此源氏山は、むかし義家朝臣
坂東の武者を集め給ひし所とかや。
後に伝えて白はた山^旗、源氏山など云よし。
夫より五山第三寿福寺へまいる^参。此山に

・「尾」は不明。「の」カ

実朝公の御墓あり。巖窟にして唐

草のほりあり。此君の絵かき、ほり給ふと

いふはいぶかし。坂の半なかばに例いの長者の

七塔の内あり。岩屋堂、浄見寺の前を

過て、若宮小路にいたる。此道右の方に、

人丸姫の塚、麦畑の中に松の印しるし

あり。はるかに尊氏公の屋敷あと見ゆ。

是も畑なり。ゆきの下大沢へ立寄れば

日暮ぬ。灯火照てらしてだんかづら、二の鳥居

を過て、びは橋前より右へ、はせ小路に

いたる。右のかたにはせを翁の碑有。盛久

敷革のあと、松の古木あり。長谷の三ツ橋

屋へ戌の刻近き頃やどる。

・戌の刻：夜八時頃

第四日

廿一日 晴、辰の刻過る頃、このやどりを立出、

光則寺へ参る。此寺に日朗・日親両上人

の土の牢有。日蓮上人龍の口の御難の時、

両上人および四条金吾兄弟も此所にて

禁獄じくせられしとかや。牢の前なる堂に

六人の像有。門を出て左りのかた、山の頂に

山王の社あり。夫より深沢の三仏へ参る。

昔頼朝公、上総国大野五郎右衛門といふ鑄

物師に命じて造らせ給ひしか。堂は

政子御前の御寄進といふ。北条高時亡び

しころ、頃兵火のために堂は焼失やけして、

今はぬれ露座仏となり給ふ。御丈五丈といふ。

稲村がさ崎ぎ、長谷寺觀世音へ参まいる。御丈

三丈三尺、春日大神作り給ふといひ云伝ふ。

本堂の内に楠の手水鉢有。東山義政公

納め給ひよし。右の方に大黒天の像

あり、弘法大師の御作といふ。本堂より東ひん

がし南を望めば、由井が浜・三浦三崎の

はてまで残りなく見へ渡りて、まことに

絶景なり。坂の半なかばに阿弥陀仏の像有、

頼朝公の御寄附といふ。夫より山坂を

こえて越佐助稻荷へ詣まうづ。此道殊ことこ

難所なり。また三ツ橋屋へ立寄、風の支度

と調このへて五しん霊のみや御社しろに詣づ。権五郎

景政を祀まつる。眼薬を出せり。袂石・手玉たもと

石などあり。社内名物力餅商をあきなふ。

同じ所に星の井の清水あり。坂の上に

虚空蔵善薩ぼさつへ参まいる。院内に宝物数あま

たあり。朝比奈の切通しを摩のぼりて、

浄善寺・極楽寺へまいる^参。天正十八年の御朱印禁札あり。こゝを出て右のかたに^方、弁慶の腰かけ松見ゆ^懸。ゑだ町を左りに見なし、坂をくだれば日蓮上人の袈裟衣掛松あり。十一人の塚有。程なく支度茶屋として三軒あり。七里が浜にいつ^出。右の方、横手が原の古跡有。見かへれば由井が浜・袖が浦、浪の向うよせかへるもいとめづらし^寄。わらはべ^重あまたむれあて^数、海に入、さまくのわざを^業なす。あやふくもまた興あり。夫より腰越村に至る。彦根侯御預りの所とかや。海岸に御台場あり。満福寺へまいる^参。義経の腰越状、此寺に納め有しに、僧の住ねば、今は同じ所なる泉常寺に預りてあり。こゝにて見侍りぬ。夫より片瀬村龍の口山へ詣づ。院内に光りの松、うろの内に^洞妙見大士を安置せり。左りの方、上人の土の牢、祖師の鑄像を安置せり。本堂は敷草堂とあり。左りの方に七面の御社あり。浜辺より海面を見渡すに、風景殊にすくれたり^優。門前に四五軒茶店

あり。こゝよりゆへく真砂地にて、ふる^降
つむ雪をふみ分る心ちす。渚^地に出て
舟渡りして江の島へ上り、恵比寿屋と
いへるにゆ^宿どりを定めて、坂をのぼ^上れば、
なかば^中に下の宮の別当所あり。爰より右の
かたに^方岩本院、奥の院岩屋の別当所と
いふ。隨身門の前に小池あり、かたは^傍らに、
かへる^蛙石として大きな石有。坂を登りて
三重の塔有。五智如来を安置せりと云。
なほ坂をのぼ^登りて下の宮に詣づ。慈悲上人
の開基といふ^云。爰より左りへ廻りて上の宮に
詣づ、慈覚大師の開基とかや。此宮の
別当所有。金剛水として頂に清浄の
水あり。こゝより廻りて茶店二三軒あり。
遠眼鏡をかけ貝細工など商ふ。夫より
原道を過て一の鳥居有。こゝ^殊に遊行上人の
成就水として清水井あり。山二つの堺を
地震^知しらすといふ。里の方になぬ^{地震}ありても、
爰よりはたえてゆ^絶らずとかや。二三の鳥居を
すぎ^過て岩屋の本社へま^末つづ。本社は修理
果たれど、拜殿はいまだ事ならず。左の方に
亀石とて、自然に亀甲のあらは^顯れたる石

あり。夫より坂をおりて海岸にいつ。此所を

児ヶ淵といふ。竜灯の松あり。尚岩山を

下りめぐりて岩屋に至る。奥深く二町

余り有しかや。鳩数多洞の中に巢をかけて、

参詣の人になれたり。留守居の弁天とて

神体有、此所より人毎に松ともして奥に

至る。弘法大師がち水とて清き水あり。

諸神・諸ぼさつ鎮座し給ふ。奥の院は

左右共に金胎両部を祭る。日蓮上人

こし懸石などいふもあり。無明の橋少し

もどりて、胎内くぐりをぬけ、上人ねすがた

石といふも有。此岩屋は弘法大師、つむらの

湊より六字の名号をかきし舟板に

乗て此所に来り、ひらき給ひしといふ。

頼朝公御遊覧有し時、海士をめて、

貝魚などらしめ給ひしゆゑに、魚飯

石・まな板石などの名ありとかや。こゝに

海人の集り居たるにもとめければ、やがて

うみに入、浪を分てあわび・さざえなど取得て

もて来ぬ。こゝより右に伊豆の山々、左りに

三崎の浦々、また沖の方に大島見ゆ。誠に

絶景なり。夫よりまた元の坂をのぼりて、

奥の弁天の前にいづ。脇道を過て夕つ

かたやどりに帰りぬ。その夜、雨降り出ぬ。

第五日

廿二日 小ぢめ小ぢみなし、さわど海岸の

ぢぢわすれがたく、辰の刻過る頃、又若屋入

まゐりぬ。まな板石のうへ、少しく高き所入

あがるに、此時雨間なりければ、しほひへ

海のおもて、磯うつ浪のけはひなとなが

なるに、きのふ見しよりも汐高へい、いの

石の上残りなへ、浪の打かゝねる時は、おながう

白だへの中じたゝすむむ地をする。鳴。

来る浪は、たゞすいしやうもつしへねるかと

おもはね、若のはびまにみなぎるなみは

千尋の滝の落くるこそまがら。

あら磯の若手打こす 浪見わび

海のうへにも たきはあしけり

爰にやゝ久しくたてれど、詠めつきず、

やゝもあらず午の刻近き頃、残多くも

帰らんとして、うしのおゆみの見かへり／＼、

心のこして本宮の前、上の宮より右の

かた、下の宮の鳥居前にいづ。しへて思の

細工物などをとくのへ、恵比寿家に立寄て、
夫より嶋をはなる。此時又小雨降り出
たり。渡し場を過て片瀬村、すは両社の
前より、同じ所の渡しをこへ、石上村に出
て藤沢に至る。みなと屋といへるにて休らふ。
遊行寺へまいる。開山は一遍上人とかや。
仁王門を入れて左りかたに方丈、右なる坂を
のぼれば小栗満重の堂有。宝物種々
あり。主従十一人のはか、照手姫のしるし、又
鬼鹿毛を馬頭観世音とあがめ、かたはらに
しるし有。こゝを出て松原を過、戸塚に
いたる。鎌倉への追分・長いも坂・焼餅ざか
などを過て、むさし・さがみの堺木にて休らひ、
程ヶ谷の並岡といへるに夜に入てやどりぬ。

第六日

廿三日 曇、辰の刻過る頃、やどりを出て
神奈川の台にてしばし休らひ、川崎、
六郷をこえて、大森なる山本にて支度
とくのへ、それより品川を過ハッ山にてやすみ、
泉岳寺へまいる、田町なる八幡の社に詣で、
夕暮の頃我家にはかへりぬ。

・田町の八幡・御田八幡

・我家・八丁堀の拝領屋敷

わが宿に けふたちかへる 旅衣

・旅衣：旅装束

ぬぎあへぬ袖に あまる嬉しさ

あとがき

こは、道のゆくへの口すさみ、所につけたる
あそび・たはむれなど、いづれも其まことを
しるし、はた、時代の路先のおぼつかなき
ことども、道の辺のひな人の物がたり、
あるは何ない子どもいふまゝを書つけつ、
なるは後見むをりの思ひ出として。

跋文

いこし年、李院君の木曾道中の旅日記のは
書せし事ありしに、こたひ内君江の嶋詣ふでの
旅日記の末に、こが文を飄酒屋のぬしめて
乞ひ給ふ。其旅日記をつらく見侍るに、名処
くの歌さへ書ひつけて、目のあたり景色

・書ひつけて：書きつけて

(音便)

を見るにつらく面白う覺へける。李院君は
五七五の俳句・ざね歌の滑稽を宗とし、
内君は景色をつばらに記して歌よみ給ふ。

夫婦別ありのひじりの教へにかなひて、

□ふたの中、むつまじき家のいやさかゆへしる

・□ふた：とじ蓋の意か

しなるべし。は書せしえにあれば又巻の末に

□ 判読不能

文しるしぬるは、冬尾 調ふ嬉しさを、老も拙も

・冬尾：掉尾

忘れて筆を走らす事しから。

安政乙卯のとし仲夏 八十翁 朴園陳人